

# 「お札で、願いがかなうかしら」

http://www.kyoto-arc.or.jp  
 (財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



さまざまな「お札」

1 長岡京左京三条三坊一町出土 (『向日市埋蔵文化財調査報告書第67集 長岡京跡・中海道遺跡』(財)向日市埋蔵文化財センター 2005年より転載)、2 平安京左京六条一坊八町出土、3・4 鳥羽離宮跡出土、5 長岡京右京六条条間南小路北側溝出土 (『長岡京市埋蔵文化財センター年報平成12年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター 2002年より転載)

はじめに『枕草子』や『源氏物語』には随分たくさんのおまじないが登場します。『源氏物語』の帯木の巻の「雨夜の品定め」では、光源氏や頭中将らが恋愛談義をしています。この場面、実は帝の「物忌み」に際して、光源氏を含めた臣下たちも、また、宮中にこもって宿直し続けているところなのです。物忌みというのは、不吉な出来事がありそうな時、住まいに悪霊を寄せ付けないため、一定の期間謹慎することです。その際に陰陽師に占わせ、門を閉めて物忌札を立て、外界の人に物忌み

このような物忌みに使った札が、

長岡京や平安京などで発見されています。長岡京では、「今日は日が悪く、たやすく出入りできません」と書かれた物忌札が左京三条三坊一町の屋敷跡で発見されました(お札1)。また、平安京左京六条一坊八町では、「固物忌」と書かれた平安時代後期のものが発見されています(お札2)。鳥羽殿(鳥羽離宮跡)では、「物忌みをしています。咄天罪様。律令のごとく急いで願いが叶いますように」と書かれた平安時代後期のものがあります(お札3・4)。咄天罪とは道教の神様の天罪星のことで、北斗七星の別名であり、治病や寿命延長の効能があるとされています。

都の「まじない」 当時は、疫病のほか火事・地震・洪水などの災害が頻繁に起こり、人々は日々の不安を抱えていました。このような災害は現代でも私たちを苦しめています。当時の人々にとっても、どうすることもできない災いでした。それらを鎮め、防いだりするために、様々な「まじない」に頼っていたわけです。

このような「まじない」の一つがお札を用いた「まじない」で、これまで都をはじめとして全国の遺跡から発見されています。

お札の種類 発掘調査で発見されたお札は、使われた目的によって①物忌み、②地鎮め、③疫病除け、



「まじない」遺物の出土状況(鳥羽離宮跡 124次調査)



木製品の出土状況(鳥羽離宮跡 124次調査)

④悪霊除きなどに分けられます。①には、「物忌」あるいは「堅固物忌」と呪文などが書かれます。②には、「土公」の文字や呪文が書かれ、お札だけではなく土器に書く場合もあります。③には、神仏の名号や梵字、願いをかけた人名や呪文が書かれます。蘇民将来札もこれに含まれます(お札5)。『備後国風土記』逸文には、むかし蘇民将来という人が旅の途中の祇園牛頭天王に宿を貸したところ、蘇民将来とその子孫だけは以後疫病にかからなかった、との話が載っています。牛頭天王は元来疫鬼の首領で、諸悪の根源であり、祇園御霊会の祟り神でもあります。④には、悪霊名などと共に呪文が書かれます。

お札を用いた「まじない」の作法

お札を用いた「まじない」は、僧侶や陰陽師・神主などが、お札とお供え物を用意した祭壇を作り、それぞれの作法通りに祈願されたと考えられます。「まじない」の後はお札などを飾ったり、身に付け

たりします。効能がなければ、また別のお札が用意され、何度も「まじない」が繰り返されたことでしょう。また、不要になれば、溝やゴミ穴などに捨てられました。お札は、公共の場所ではあまり見つかっておらず、個人の屋敷の内部や周辺で多く発見されています。災いは外から来ると考えられており、「内と外」を分けることが重要で、そのため「まじない」は主に空間の境界で行なわれることが多いようです。

『抱朴子』という道教の教説書には、「護符の類は桃の板に大書きし門戸の上、または四方四隅、梁柱、住処五十歩の道側の要処に著する」とあります。また『今昔物語集』の中には「門ニ物忌ノ札ヲ立テ」とあり、物忌の際に、軒や門・庭中に立てたことがわかります。鳥羽殿出土の物忌札の頭部には釘穴があり、片面には「西」と書かれています。同様の札が3点見つかっていて類似していることから、建物の東西南北の柱などに打ち付

けられていたと考えられます。

昔と今の「まじない」 このようなお札は、人形代や土馬などよりも新しく、奈良時代頃から出現します。その後、長岡京期から平安時代にも使われていますが、数は少ないです。ところが、平安時代の後期頃から増加し、鎌倉時代以降には種類も増え、出土量も急増します。このような様相は、都での人形代・土馬などの専用器具を使った公的な「まじない」が衰退するのと対応しており、都に暮らす貴族や住民の意識の変化を反映しているといえます。

お札を使う「まじない」は、宮中や京内の屋敷で行なわれたことから私的な現世利益を願ったものと考えられ、わが国古来の神道に仏教・陰陽道・道教・修験道などが混じった形で執り行なわれたことが知られています。蘇民将来のお札は祇園祭の粽にも付いていません。願いをかなえるために「おまじない」をするのは、今も昔も変わらないようです。(上村和直)